

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 7 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320022

研究課題名(和文) 生命統治時代の オイコス 再考とポスト・グローバル世界像の研究

研究課題名(英文) Rethinking of 'Oikos' in the Age of Bio-Governance and Investigation of the Image of Post-Global World

研究代表者

西谷 修 (NISHITANI, Osamu)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：20189286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 16,100,000円、(間接経費) 4,830,000円

研究成果の概要(和文)：折からの東日本大震災と福島第一原発事故は研究課題を先鋭化するかたちで起こり、これを受けて、グローバル化した世界における「オイコス」再検討という課題を、現代の文明的ともいふべき災害や核技術の諸問題、さらに近年注目されている「脱成長」のヴィジョンに結び付け、主としてフランスの論者たちとの交流を通じて「技術・産業・経済」システムの飽和の問題として明らかにした。その内容や、そこから引き出される展望については、下に列記した雑誌諸論文や以下の刊行物に示した。『「経済」を審問する』(せりか書房)、報告書『核のある世界』(A5、100p.) 『自発的隷従を撃つ』(A5、121p.)

研究成果の概要(英文)：By chance, the theoretical problem-setting to re-consider the meaning of "Oikos" in the Globalized world was drastically sharpened by the real severe accidents on the 11th of March in 2011 in Japan, the Earthquake and Tsunami in Tohoku and the triple reactor meltdowns of TEPCO's Fukushima No.1 nuclear power plant thereafter.

Hence more emphasis than the original plan was laid on the research of structures and problems of nuclear technology, and on the visions and scenarios of "post-growth" economy after the disaster. The collaboration with foreign --mainly French-- researchers, deepened our recognition of the current world as the complex system of technology, industry and economy. The outcomes of our consideration have been published as several books and pamphlets as "Rethinking the <economy>", "The world with the nuclear", "Criticize the <voluntary servitude>" etc..

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：思想史

キーワード：オイコス グローバル世界秩序 新自由主義 生命統治 産業経済 核技術 沖縄 自発的隷従

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の基本的モチーフは、グローバル化以後の世界が混迷を深めていること、グローバル化によって世界編成・統治の基盤領域が各国の主権的政治から共通ルールの経済管理へと移ったと言われるが、その経済システムが世界金融恐慌で破綻を示しただけでなく、世界的に貧富の差が拡大し、社会不安や秩序不安定化の原因になっていること、さらに、経済に欠かせないはずの「成長」がすでに半世紀近く前から「限界」を指摘されているにもかかわらず、現実的には相変わらず「成長」至上の考え方でしか対応がなされていないこと、そしてそのための行き詰まりが随所で露呈してきていること、等々の状況を背景に、このような事態を構造的・理論的にいかに理解し、特徴的な地域においてそれが具体的にどのように発現しているかを検証、それに対する適切な対応の方向を新たな世界ヴィジョンとして探る、といったところにあった。この課題は科学技術による社会の産業的組織化、そしてその統治という、ほとんど文明論的の広がりをもつ。

現在の産業経済のグローバル展開が「成長」だけを求めて続いて行けば、早晩世界的破綻は避けられない。それは直感的に理解されても現実を動かす理論にはならない。この現代の文明的隘路の出口を求めため、本研究は現代世界の関連現象の観察分析を行いながら、経済原理の由来とグローバル世界での原理化のプロセスを理論的にたどり、ポスト・グローバル化の世界を構想する糸口を求めようとした。

本研究に先行する科研費共同研究「戦争・経済・メディアからみるグローバル世界秩序の複合的研究(平成19年度~21年度)では、グローバル世界秩序において共通のレジームとなった「テロとの戦争」と新自由主義的世界統治の関係、さらにはそれに連動するメディアの諸問題を考究してきたが、本研究はそれをさらに視野を広げて、グローバル化時代の人類的課題として引き継ぐものである。

そのため、問題を「生命統治時代のオイコス再考とポスト・グローバル世界像の研究」として立てることになった。それは、経済が政治を後景に斥けるように見えるのは、経済が統治の原理となったことの反映だと考えたからである。そして「生命統治」というのは、マルサスの例に見られるような、あるいはマルクスとダーウィンの関係に見られるような、経済学と生物学との史的な「結託」という認識を反映している。

現代の生命科学の起源にある生物学は、進化論と絡みながら人間の生存を科学技術の対象とし、「開発」やマネジメントの対象としてゆく認識論的基礎となった。経済学と生物学とのこの関連は、経済学が当初「政治経済学」として出発したことを勘案するなら、M・フーコーが「生・政治」(生物としての

人間の生存そのものを対象とする政治)として提起した近・現代の統治の問題系を、別のコンテクストから立て直す要所となる。

そのような認識をもとに、先行する共同研究の主要メンバーが課題をさらに継続的に展開する形で、本研究では近代以降の経済観念を再検討し、それを通して人間世界の「持続可能性」の基盤はどのような観念を必要とするのかの考究を目ざした。

指針としたのは、まずはカール・ポラニーによる経済観念の歴史化と相対化であり、経済が「埋め込まれた」生存環境であるオイコスの現代的意義の検証である。それは、ポラニーの経済人類学を単なる民族学の一局面に落とし込めるのではなく、むしろ経済活動する人間の総合的な学として組み替える意味合いをももつことになる。また「生命の経済」を構想したニコラス・ジョージスケ=レーゲンや、「非-知」の認識論的冒険を含んだジョルジュ・バタイユの「一般経済学」も重要な参照項とした。

## 2. 研究の目的

研究のモチーフで述べたような観点に立ち、グローバル化した世界で経済原理が他のあらゆる配慮を圧して統治を律する状況を、西洋の世界化とともに広がった近代産業文明と経済システムの危機として捉え、現代世界における経済原理の優位とそれが引き起こす諸問題を洗い出し、経済観念による世界統治の成立を解明するとともに、近代以降の経済観念ないしはそれがもつ規範性を、その起源のオイコスに照らして相対化し、現在の経済還元主義的世界ヴィジョンに代わって、広範で多様な生存・統治形態を可能にするような、グローバル化以後の世界のヴィジョンを求めよう。

まず、人間の共同的営みとしてのオイコスの観念を再考し、近代の技術・産業・経済システムによる人間の労働力化(G・アガンベンの言う「むき出しの生」)と、文明世界のシステム化(あらゆる事象が誰に責任を問うこともできないシステムとして展開され、H・アレントの言う「悪の凡庸化」が起こる)の構造を分析し、現代世界の危機と統治形態の機能不全の原因を問う。

そして、経済観念を「脱構築」することで、現在の隘路から抜けうる社会組成の新たな原理を探る。言い換えれば、近い将来の破綻の明らかな現在の経済文明システムの不全を解明し、技術と産業社会の別の編成の可能性を探ることで、グローバル化以後の社会的生存のヴィジョンを追究する。

現在、世界のいたるところで進む社会の解体(貧富の差の拡大)や個の孤立、労働条件の劣悪化、生存の意味の喪失、民主主義の機能不全、そしてそれに伴って高まるナショナリズム等は、経済原理で進むグローバル化がそれぞれの社会に共通に引き起こす現象と

みられるが、このことを上記の問題系の具体的表れとして取扱い、それらをたんに一領域の問題としてではなく、哲学、経済思想、国際政治、人類学等の観点から総合的に検討する。

これはおそらく現代世界共通の課題であり、折からヨーロッパでも、経済の原理的批判とも言うべき「脱成長」思想が論じられており、それとも呼応するかたちでの学際的研究を試みる。

### 3. 研究の方法

毎年毎に取り組む主要テーマを定め、それぞれの研究分担者が各自の分野からこの課題にアプローチする。テーマにしたがって、中山（経済思想）が経済原理批判・オイコノミア再考、土佐（国際政治学）が生命統治システムと地域・国際政治におけるその表れ、真島（文化人類学）がグローバル化に関係する社会変容ととりわけその極端なケースとも言えるアフリカの地域変容、崎山（ラテン・アメリカ研究）がグローバル化で特別の位置を占める南北の「アメリカ」世界の分析という具合に、それぞれの分野の研究を主導し、西谷がグローバル化全体の一般的問題系に関する知見をベースにそれを統括する。なお、途中からフランス留学より帰国した森元が制度移転・表象研究を分担するために加わった。

また、外部に研究協力者（アラン・シュピオ：コレージュ・ド・フランス教授、ジャン＝ピエール・デュピユイ：スタンフォード大学教授等）を得て、ヨーロッパからの観点とそれぞれの専門分野に関して、また世界の先端的研究に関して情報提供を受けるとともに、研究協力をあおぐ。

段取りとしては、年に数回、テーマを決めて国内で公開研究会を開き、議論を重ねるとともに、国際セミナー・シンポジウムを開催し、外国研究者との研究交流をはかり、国際的研究の水準に合わせるよう努める。そのためにも海外の学会等にも積極的に参加し、また機会を捉えて、来日する外国研究者との研究交流を心がける。

国内外の関連する地域・箇所などを共同視察し、現場を実際に見るとともに現地で見られる知見を集め、理念的・理論的研究を具体的に現実に照らして検証・深化する。

成果をまとめて公開シンポジウムを開き、公開で議論を集約しかつ深めるとともに、社会に発信することに努める。また、その成果はできるだけ書籍、記録誌のかたちでの出版することをめざす。

なお、本共同研究一年目の終わりに東日本大震災と福島第一原子力発電所事故による激甚災害があり、そのこと自体が本研究の課題を先鋭的にし、復興や事故処理が本研究の基本課題と重なったため、二年目以降は西谷・中山を中心に、核技術と人間の関係、そ

して産業システムの問題、さらには「復興」と社会システム再編などの原理的考察が進められ、具体的な方向として「共生」と「脱成長」に向けての研究の比重が高まった。その点で、当初の計画との多少の変更が生じることになった。

### 4. 研究成果

共同研究全体の方向性とベースを決めるオイコス 再考の課題は、先行していた経済・金融危機の研究を継承し、フランスで1980年代から「社会科学における反功利主義運動（MAUSS）」を30年にわたって主導してきたパリ第10大学のアラン・カイエ教授を招いて国際シンポジウム・ワークショップを開き、共著『経済を審問する 人間社会は"経済"的か』（せりか書房）をまとめた。ここでは、経済学ばかりでなく現代世界の規範的言説となっている経済の観念そのものを相対化しながら、政治（民主主義）との関連のなかで社会再編を検討する必要があることを明らかにした。

それが思想史的パースペクティブを示すものだとすれば、現在グローバル世界の経済的ドグマとなっている新自由主義の展開については、中山が著書『経済ジェノサイド』（平凡社新書）で20世紀後半におけるフリードマン思想の台頭と世界浸透の経緯を、政治・社会史との関連でダイナミックな記述にまとめ、西谷が論文『自由主義の文明史的由来』（スポーツロジック2号）で、新自由主義のみならず西洋における自由主義・個人主義一般の起源と生成の諸要素を、キリスト教にまで遡って思想史的な解明を試みた。そして土佐は、グローバル世界秩序の展開のなかでの新たな民主主義の可能性について『野生のデモクラシー』を著し、グローバル化のなかでの自生的デモクラシーの萌芽をアナキズムの伝統の中に見て、投票で計量化される民主主義そのものの経済化に対する批判の視点が那邊にあるかを示した。これらの単著も、共同研究で共有された問題設定や認識を踏まえて個別的にまとめられた成果である。

また、産業技術を代表する核技術と社会との関係について、数度の国内現地視察をもとに研究会およびシンポジウム（「核と未来」）を重ね、とりわけ3・11後の社会的課題を念頭に、議論の成果を報告書『核のある世界』としてまとめた。これには、先行する共同研究ですでに扱われていた、国際社会における核戦略をめぐるラウンド・テーブル「核と現在」の成果も統合されている。さらに、このテーマは今後も掘り下げるべきものとして、フランスからレンヌ大学クリストフ・ダヴィッド教授を招いてワークショップを開き、この道の先駆者であるギュンター・アンダースをめぐる議論を交わして、今後のフランス・ドイツ圏との研究協力の道筋をつけた。

加えて、市場経済や経済統治の根本にある社会構造のからくりに関して、きわめてめ啓発的な記述を残したエティエンヌ・ド・ラ・ボエシの著書の翻訳出版を促し、その刊行を機にこれもシンポジウムを開いて、多角的な議論を行い、報告書『自発的隷従を撃つ』をまとめた。

このような成果の積み重ねから、科学技術をもとに産業を組織し社会を産業化しつつ、その運営を個人の自由な欲望追求という経済原理に委ねるシステムを「技術・産業・経済」の三位一体のシステムとして把握し、現代世界の諸問題をそれを軸に解釈する見方をかくりつするとともに、その「脱構築」によって新たな生存の在り方（共生）を描き出すという課題もしいに明確になってきた。このポスト・グローバル世界像の研究はまだ十分に達成されたとは言えないが、今後の方向として「共に在る」という現代哲学の共同性の思考をベースにしながら、「共生」の理念を練あげることが今後の課題として出ている。その具体化の方途に関しては、主として、現代の破局の不可避性とそれを回避する可能性を特異な「カタストロフィ論」として精力的に展開するジャン＝ピエール・デュピュイ（スタンフォード大学教授）や、「脱成長」の理論家セルジュ・ラトゥーシュ（パリ南大学名誉教授）との研究交流を行い、その一端をいくつかの対話のかたちで（訳書解説、雑誌『世界』、立命館大学等で対話）公表することができた。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 31 件、主要な論文 21 件にとどめる）

西谷修：不易の書『自発的隷従論』について（解説）ラ・ボエシ『自発的隷従論』、2013、pp.225-253、査読なし

西谷修：自由主義の文明史的由来 ナオミ・クライン『ショックドクトリン』から、スポーツロジャー2、2013、161-189、査読有

西谷修：デュピュイ氏への応答、ここにある「未来」にどう向き合うか、立命館言語文化研究、112、2013、pp.15-23、査読有

中山智香子：タックスヘイヴン、またはフリードマンの亡霊、熱風（GHIBLI）11-5、2013、pp.11-18、査読有

土佐弘之：人権ギャップの維持／縮小の政治：交差するラインを超えて、黒澤満編『国際共生とは何か』（東信堂）2013、pp.46-65、査読有

土佐弘之：アナキズムと半植民地主義的ナショナリズムの対位的読解、東アジア研究、50-2、2013、pp.303-308、査読有

真島一郎：鏡像エネルギーの危機 セネガルから、SEEDer、8、2013、pp.68-72、査読有

NISHITANI, Osamu：Où est notre avenir?, EBISU47、2012、pp.59-68、査読有

西谷修：接合と剥離の40年、困難な「復帰」のなかの「自立」の兆し、世界831、2012、pp.101-106、査読有

土佐弘之：野生のデモクラシーについて 新しいアナキズムのグローバル・ポリティクス、国際政治、168、2012、pp.131-145、査読有

土佐弘之：破行的グローバル化にともなう境界と生権力の変容、国際政治168、2012、pp.131-145、査読有

土佐弘之：クロノトポスの政治的変容：四千年文明国家と百年国恥地図、現代思想、2012、pp.59-71、査読なし

西谷修：地震に破れ解き放たれた時間、または手触りのある未来、世界824、2011、pp.12-20、査読なし

西谷修：“自由”の劇薬がもたらす破壊と荒廃、ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』に寄せて、世界822、2011、pp.112-125、査読なし

西谷修：近代産業文明の最前線、世界817、2011、pp.80-88、査読なし

中山智香子：レントで暮らすヴァイキング?アイスランド「破産」が示すもの、現代思想39-3、2011、pp.134-145、査読なし

土佐弘之：過剰な安全装置に抗うデモクラシー 非対称的世界内戦とアラブ革命、世界817、2011、pp.80-88、査読なし

TOSA, Hitoyuki：Securitization of Development and Clinical Gaze upon Poverty:Reconsidering the Political Shift of Development Discourse、Paradigms of Security in Asia(edited by Arpita Basu Roy [Calcutta]), 2011、11-26、査読有

崎山政毅：グローバル・ヒストリーズをめぐって トランスアトランティック／トランスパシフィックな視点をもとに、立命館言語文化研究23-2、2011、pp.1-9、査読有

中山智香子：『マネジメント』の人間主義的功罪、現代思想38-10、2010、pp.160-171、査読なし

21 中山智香子：非市場型社会の構想：K・ポラニーの二つの「戦後」、社会思想史研究34、2010、pp.37-51、査読有

〔学会発表〕（計7件）

NAKAYAMA, Chikako, Critic of Neo-liberalism in the Polanyian perspective, The First World Keynes Conference, 2013/06/27, Izmir(Turkey) 森元庸介、留保のために、表象文化論学

会、2012/11/10、東京  
NAKAYAMA, Chikako, Polanyi 's thought  
in the context of post-catastrophy, The  
12th International Karl Polanyi  
Conference, 2012/11/08-10、Buenos  
Aires(Argentine)  
西谷修、招待講演、近代の臨界：ナシ  
ヨナリズムとモダニズムの呼応と相克を  
めぐって、社会思想史学会シンポジウム  
「第一次世界大戦前夜の思想：20世紀思  
想史の水脈」、2012/10/27、東京  
森元庸介、届けられぬ言葉、日本フラン  
ス語フランス文学会、2012/06/03、東京  
NAKAYAMA, Chikako, Fade-out and  
Resurgence of Subjectivity in Market  
Analysis, International Association  
of International economics,  
2011/07.06, Kiev(Ukraine)  
NAKAYAMA, Chikako, The Crisis of the  
individual reconsidered, Heterodox  
Economics Conference, 2010/07/0,  
Bordeaux(France)

真島 一郎 MAJIMA, Ichiro  
(東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文  
化研究所・教授)  
研究者番号：10251563

土佐 弘之 TOSA, Hiroyuki  
(神戸大学・大学院国際協力研究科・教授)  
研究者番号：70180148

崎山 政毅 SAKIYAMA, Masaki  
(立命館大学・文学部・教授)  
研究者番号：80252500

森元 庸介 MORIMOTO, Yosuke  
(東京外国語大学・外国語学部・研究員)  
研究者番号：70637066

〔図書〕(計7件、うち翻訳2件)

西谷修・山形孝夫、3・11後、この絶  
望の国で 死者の語りの地平から、ぷね  
うま舎、2014、260p.

中山智香子、経済ジェノサイド フリー  
ドマンと世界経済の半世紀、平凡社、2013、  
296p.

土佐弘之、野生のデモクラシー、青土社、  
2012、370p.

西谷修(編著) 復帰 40年の沖縄と日  
本 - 自立の脈を掘る、せりか書房、2012、  
195p.

森元庸介(翻訳) J-P.デュピュイ『経済  
の未来 世界をその幻惑から解くため  
に』、以文社、2012、274p.]

西谷修・金子勝他(編著) “経済”を審  
問する 人間社会は“経済的”なのか、  
せりか書房、2011、200p.

中山智香子(翻訳) ジョバンニ・アリギ  
『北京のアダム・スミス』、作品社、2011、  
pp.677

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

西谷 修 NISHITANI, Osamu  
(東京外国語大学・大学院総合国際学研究  
院・教授)  
研究者番号：20189286

### (2)研究分担者

中山 智香子 NAKAYAMA, Chikako  
(東京外国語大学・大学院総合国際学研究  
院・教授)  
研究者番号：10274680